麻姑山俳句会10月例会

遷る風は高く強く愁うる心に吹きすさぶ。
眼を遮り顔を上げ、我もまた青空仰ぐ木々のひとつなれば。
冬の足音を確かに聴いて十一月の扉は開く。

【今月の一句】

満月に財布ふりふり夢を追う

豊見山　康忠

月明かり背中を押して。
遠く近く祭の音、行きつ戻りつ立ち止まり、
又立ち止まり。見知らぬ顔の中に失くした自分を探す。
ためらいなく駆け出せたあの頃に。

（解説・仲間　健）

豊見山　康忠

義歯ゆるむ渡りの群れと秋の冷
秋深夜アカペラあまた虫の宴

伊志嶺　あきら

白寿の冬コロナインフル蹴飛ばして
通り池潜れば我に青き尾が
マフラーの肩が拒めりプーチンを

前川　千賀子

鈴鳴らしとんぼに猫のジャンプする
秋茄子の刺も優しき夕厨
目疲れの瞼の闇にちちろ鳴く

石川　信江

月明に導かれ行くライブかな
琉球の外交手腕今生かせ
ワレワレが地球生命滅ぼせり

渡久山　和子

ロボットの持て成すランチ今日の秋
爽やかな幻想の舞ひミャークヅツ

宙憧子（西里　恵子）

重なりし雲の紋様秋薔薇
シャトルバス星波連れてなりやまへ
知覚出来ずもアト秒とふノーベル賞
秋台風世界の紛争いや増せり

岡　恵子

差し当たり逃げるも吉か杜鵑草
ミャークヅツ歌も踊りも渦となり
秋日向デジタル時計のゾロ目かな

友利　敏子

名月や雲間めぐりてやっと会え
子も孫も待ちくたびれしハローウィン
秋暑しおしゃれ着未だ箱の中

仲間　健

明け放つ窓は鈍色神無月
戦火のまたTVより十一月
帰る家忘るるごとく暮早し

友利　昭子

かの人もともに舞ひいるさしばかな
鳥帰るおかえりなさいみな無事か
さしば舞ふ島の一夜のやすらけく

会誌として調査がつづられてきた（1～5集）

10円玉1枚、3分間で聞ける子ども向けの「みんわ」

宮古島民謡
「なりやまあやぐ」の起源を探る（上）

琉球大学教授　仲座　栄三（えいぞう）

宮古民謡の名歌「なりやまあやぐ」の意味について、さまざまな解説が与えられている。特に、多いのは、「あやぐ」を綾語や綾歌と書き、「なり山」を「夜な夜な遊び浸っている所や人」と解釈した上での、「心をしっかりもて」という教訓歌とする理解である。しかし、筆者は、これに以下の解釈を与えたい。

1、成功したヤマは、成功したなりのことがあって、現在がある。

羨（うらや）ましがっているあなたは、それなりのことがあって、現在がある。

2、成功したヤマよ、大事な所に出て、自慢していてはならない。

羨ましがっているあなたも、大事な所に出て、羨ましがってだけいてはならない。

その歌詞は、次のとおりである。

1　なりやまや　なりてぃぬ　なりやま
　しみやまや　しみてぃぬ　しみやま
（イラユマーン　サーヤヌ）
　しみやま　参いすてぃ　しみぶり　さまずな
2　なりやま　参いすてぃ　なりぶり　さまずな
　しみやま　参いすてぃ　しみぶり　さまずな
（イラユマーン　サーヤヌ）
　しみぶり　さまずな
（國吉源次「宮古民謡特集」から引用）

2番の歌詞には、一般に語尾に「シュウ（主）」が付いている。しかしそれは、後付けと想定され、不要と判断した。また、これらの歌詞の頭には、「サアー」が付いた形で歌われている。昔の人々が民謡の歌いだしに「サアー」と気合入れをした後に歌っていたことから想像すると、「サアー」は、「それでは、これから歌います」「さぁー、歌ってみるか」という発声と判断されるため、上の歌詞では取り除いてある。

1番・2番共に、「なりやま」について歌っており、題名が「なりやまあやぐ」となっていることに符合する。「なりやま」は、「成りヤマ（ヤマは人名）」を表し、成功者の意味をなす。「成り」の後の人名は、やはり「ヤマ」となり、「積み上がった」や「やまなり」を連想させる。したがって、この場合、「なりマツ」も「なりツル」も意味をなさない。一方、「すぅみやま」は、「しみやま」であり、「シュウミやま」である。直訳すると、「欲張り者」を意味する。歌い手が親の場合には、「うらやましがっているあなたは」と解すべきであろう。これまで、「なりやま」は「遊び浸っている所や人」と解釈されてきていたので、語尾に「シュウ」があった。

「なりやま」と「しみやま」は、「成功者」と「欲張り者」とを対比して、成功者を称え、そうでない者の努力を促していることになる。すでに人名（ヤマ）が詠まれているので、語尾に「シュウ（主）」が付くことは誤りとなる。これらの意味から、上で紹介したような歌詞の意味（解釈）を与えることができる。

カッコ書きの「イラユマーンサーヤヌ」は、はやし（囃子）の部分をなす。歌詞の1番は基本的に五七・五七・七という和歌の句体を成している。切字の「や」の存在も注目される。俳句「松島やああ松島や　松島や」に匹敵しよう。歌詞の2番は、後に追加されたと想定されるが、1番と関連性が強く、共に対比の形に謳われている。

次に「なりやまあやぐ」の旋律はいかにして現れたかを考える。

歌詞が和歌（短歌）の句体をなしているので、その原形の読み上げ方は、かるたを読み上げるような調子であったものと想定される。2、3回ほどかるた調子で読んだ後に、現在歌われている調子で幾度か歌ってみると、これらの調子がよく調和しているように思えてくる。「なりやまあやぐ」の旋律が現れたのは、こうして必然的であったと想像される。

最後に、歌の題名について考えてみよう。

「歌」は宮古島の方言で一般に「アアグ」であるから、「あや」「アアグ」となろう。「あや」は、「文字」や「学問」を意味する。すなわち、文字文化を背景に持つ歌となる。和歌が方言で「あや」ということになる。「トウガニアヤグ」は、神に祈りを唱えるカニが歌うアヤグということになる。いずれも、文字の存在を背景に持つ歌という共通点を有している。

「なりやまあやぐ」は、成功者の努力を称え、そうでない者の努力を促し、それらの振る舞いをも戒め、古来継承されてきた教訓歌として位置付けられる。宮古島の人材育成に潜在的に寄与してきた教訓歌が、「なりやまあやぐ」となる。また、その旋律が、日本人の心に響くのは、必然であったことになる。

※本稿（上）は10月17日に掲載。

くれた貴重な方だった。
カニ媛、城辺長間の瑞慶山春諧
■民話で八島巡り

「民話の旅」で台湾の長榮大学の学生

平良東仲宗根にあった。そしてある時、その電話局から思いもよらない話が持ち込まれた。子どもたちへの民話の普及のために特別企画を作ろうというものだった。公衆電話に10円入れると民話が一話聞けるというわけだ。私たちは大喜びで引き受けたが、そこには大きな壁があった。一話一話を3分間にまとめなければいけなかったからだ。それでも子ども向けの民話集を作ることができたらと、夜を徹してみんなで頑張った。そうしてできたのが「み

始まり定着しつつある。新型コロナの発生でしばらく途絶えていた「民話の旅」だったが、今年8月は、学生、教授ら約20人が来島して地域の人たちとの触れ合いや歴史、各地の民話などを学ぶバスツアーが行われた。

■書物から学ぶ民話の世界

昔話のことについて多くの書物が出版されているが、その中でも世界各地を歩き絵本や児童文学、さらには昔ばなしにも精通、宮古にも何度か足をはこぶ松居友氏が刊行した『昔話の死と誕生』で、

麻姑山俳句会11月例会

喧騒と静けさと。街がその装いを変える度
暦はその旅を刻んでいく。
巡り来て巡り去るものの中にひとは喜びを
見い出して。12月また終わりを始める月

【今月の一句】

あつまりて散りて秋雲とどまらず

前川　千賀子

限りなき空を全てとして。
放たれた時の矢はどこまでもゆく
いつか来るその先を見むと秋雲に心を乗せて。

（解説・仲間　健）

秋夕日背に受け漁船帰港せり　前川　千賀子
振り上げし秋耕の鍬光りけり

冬空の水色濯るべきところ　友利　昭子
永らへば会へる喜び冬薔薇
綻ろびのかなたこなたや冬の雷

うふふ秋気まま我がままあるがまま　岡　恵子
魔憂りチクッと乳房疼きけり
やさしさも嘘も方便ちちろ鳴く

友逝きて霜月風も身に刺さる　豊見山　康忠
木枯らしを涼しと咲くる立葵（たちあおい）
ポツポツと記憶途切れて人の秋

穴惑マルク・シャガール夜の空　ほりかね　よしみ
戦地まで祈りの波紋冬入日
菊膾（きくなます）はしょらずにまず話そうか

立冬やキラキラキララ朝焼ける　友利　敏子
北風と「学生時代」ハミングす
「同窓会」六十二年目の冬

神話圏に集いクイチャー祭りかな　伊志嶺　あきら
台風や与那国を討ち花蓮射つ
冬立つと乳児ら話す宇宙語を

秋光の一瞬にある記憶かな　仲間　健
賤（しず）が家に降りしく秋ひとつ星
※賤が家：貧しく低い身分の者の住まい
戦場の屍（しかばね）累々星月夜

欲しきもの欲しきと言ふ子日記買う　豊見山　康忠
献立を決めて夕暮れ木の葉髪
人待つとこの夕暮れの冬薔薇

「アヤグはいかに歌われたか」を考える（中）

琉球大学教授　仲座（なかざ）　栄三（えいぞう）

今回は、宮古島の「あやぐ」がどのように歌われてきたのかについて想像する。

トゥガニ（神の言葉をトウツキル（説き伝える）者）は、祝詞の称辞を奏する形に、神への祈りを唱えて歌いはじめる。

（この歌は、トウガニアヤグである）

うぷゆてぃらうす　まてだだき
くにぬくにぐに　すまぬすまず
てぃりあがりうすぅいよ　ばがやぐみ　うしゅがゆや
にびし　どぅだらよ

（大世を照らしている大きな太陽のように、国々を、島々を、照りあがって覆ってください、我々の偉大な御主・神様の世は、海の根のある石が荒波に耐えていつまでもあるように、いつまでも続く）

（國吉源次・宮古民謡特集から引用、以下同様）

トウガニは、御神酒で満たされた御杯を神棚から受けて頭上に掲げ皆々に向けて、「ウトーゥ」（お通りー）と言う。皆々は「オーゥ」（御主様）と頭をたれて御杯を受け取り、ただただ感謝して御杯に口を接す。「オトーリ（ミキのお通り）」である。

いつしかこの行いは、島人の日々の憩いの宴席でもまねて演じられるようになり、円陣をなして飲む仲間内の酒宴でも始められるようになる。すなわち、トウガニの奏上ほトウガニ役による口上となり、おもむろにオトーリにつなげられる。

円陣の席から、ある者は立ち上がり、ナリヤマアヤグを歌う。

サアー（かけ声であり、これから歌いますの意）
なーりやまーや　なりてぃぬー
なりやまー
しゅみやまーや　しゅうみてぃぬ　しゅぅみやまー

（成功者のヤマは、それなりのことがある）

（欲張り者のヤマは、それなりのことがある）

ここまで歌いあげると、円陣をなし手拍子の皆々はうなずき、はやしをかける。

イラユマーン　サーアヤーヌ

「そうだ、そのとおりだ。さーもう一度皆で（円陣からのはやしが入る）」

しゅうみてぃぬ　しゅぅみやまー（全員で合唱となる）

歌い終えると、皆々は異口同音に「ズミダラ」（すばらしい）と言い合い、その歌詞の教えのすばらしさを褒めたたえるのである。

そうそう宴もたけなわ、いよいよ、ある者が立ち上がり、次のように歌う。

うまんぬらば　たづなゆ　ゆるすなしゅぅ
みやらびやーいき　くくるゆるすなしゅぅ

イラユマーン　サーアヤーヌ

くくるゆるすなしゅぅ

（馬に乗る際には手綱をしっかり持て　美童の家へ行くのなら心をしっかり持て）

そしてついに、男どもは次のように歌うに至る。

ぶりゆしなんみや　あまいどぅしず
ばんブナリャ　あまいどんかい
イラユマーン　サーアヤーヌ
あまいどんかい

（浜に砕け寄せる波は　笑いながら寄せる、私に惚れた彼女は笑いながら迎えてくれる）

皆が笑顔で迎えられたかどうかは、想像に難くない。

ここで、1・2番と3・4番とに対比や意味に大きな相違があることに気づく。1・2番では主語が対比されている。3番の意味は教訓ではあるが、主語の対比はなく、悟り手が「主（しゅう）」となっている。4番では意味が男の願望に変わっている。等など、やはりナリヤマアヤグの原形は1番と2番にあることが理解できよう。

伊良部島に向かって祈りを唱えるカニ（人名）がいる。彼は、次のように歌っている。

（この歌は、イラブトゥガニである）

サーヨーイ
イラブトゥガマーン　バシガマンナヨー
パナリユトゥガ　バシガマンナヨーイー
バタスシヌマーン　ユクスユジヌ
アテアナムヌヨー

（あの伊良部島へ行こうと思うのだが、伊良部島までの間は、遠く離れていて、その間に、渡す瀬があってほしい、私が座って休んでいるこの磯からは、伊良部島はあまりにも遠くて、どうしようもないよ）。イラブトゥガニは、海岸の磯に座り、伊良部島に向かって祈りを唱えて歌うカニということになる。

これまでの歌に共通していることは、祈りの唱え（トゥツキ）であり、アヤグである。ナリヤマアヤグは祈りを唱える歌ではないが、アヤグとしての共通点を持つ。その昔、学問に長ける者は神（カン）と呼ばれた。文字で書かれていたのであろう歌詞を持つ歌が、アヤ（文字で書かれた）アーグ（歌）、すなわちアヤアーグ（アヤグ）と解されることから、「学問の歌」「文字文化を背景に持つ歌」としての説明を与えた。おそらく、古代大和の文字文化が神への祈りの歌として伝わり、アヤグと呼ばれるに至ったと思われる。

※本稿（上）は11月21日に掲載。

あってぃ、『8月しみゃーぬみゃーくずま　ぷすぬあやぐ（8月終わりの宮古島の星の唄）』うどぅ、つっふたむ

（そして『8月しみゃーぬみゃーくずま　ぷすぬあやぐ（8月終わりの宮古島の星の唄）』を作った）

1、よないん20時んな　寅ぬ方（とらぬぱ）ゆ　みーるばどぅ

（夜になり8時頃東の方角を観んみぷす（群星ー昴）ぬどぅぬ（の）ーりんみゃーずたむ

（群星・昴が上がってきた）

3、あたーまがまあとぅん　うりがあとぅからや　丑ぬ方（うすぬぱ）からどぅ

（少し遅れてその後から　北東の方から）

むいぷすぬカペラぬどぅ　あがりんみゃーずたむ

（ぎょしゃ座カペラが上がって

5、うりがあとぅからやまーよなか1時んな寅ぬ方（とらぬぱ）ぬいむぱてぃからどぅ

（その後から真夜中1時になると東の方の水平線から）

たたきゆみゃーぬどぅ　あがりんみゃーずたむ

（オリオン座が上がってきた）

6、うりがあとぅからやまーよなか3時んな寅ぬ方（とらぬぱ）ぬいむぱてぃからどぅ

ぬ

9、またどぅ　うぬときゃん　丑ぬ方（うすぬぱ）ゆ　みーるばどぅ

（またその時に北東の方を観ると）

かなまずぬどぅ　ぬ（の）ーりんみゃーずたむ

（北斗七星の頭が上がってきたんだ）

麻姑山俳句会12月例会

去年今年貫く棒の如きもの　高浜　虚子

新年の寿ぎをこの句で。
ひとは真っ直ぐに生きられぬもの、それでも始まりの日のひかり、始まりのぬくもりを心に留めて。
ひとは真っ直ぐに生きたきもの

【今月の一句】

いつと言ふ約束はなし鳥帰る

岡　恵子

ふと口遊む歌のように
何気ない言葉を何気ない仕草をずっと憶えている。
あれからまた
あれからまだ
私は此々にいる

（解説・仲間　健）

岡　恵子
ぽったりと息づく菊や朝まだき
老ひてこそ人であるべし穴まどひ

石川　信江
島サシバ自然命よ永久にあれ
サシバ舞う平和な島よ永遠に
島宝自然野草に生かされる

渡久山　和子
子をだしに買ふもありかなクリスマス
無茶振りに応じる笑顔七五三
断捨離に交じるほの香や針供養

過ぎ去れば全て笑えて煤払　ほりかね　よしみ

十六夜を見おろしている星ひとつ　友利　敏子
兄の死を越えて今年も冬菫
クリスマス亡き兄嫁のプレゼント

風強き庭燦然と石蕗の花　前川　千賀子
※燦然…鮮やか、光り輝くさま

サバニに帆と櫂を揃えて年用意　伊志嶺　あきら
プーチンに捧ぐ鎮魂曲去年今年
難民の子等と食いたき冬至粥

小鳥屋はリズムの世界冬日和　豊見山　康忠
うちふるふ八重ともあらず返り花
※八重…固有名詞で海にある遊び場

冬至梅今日も明日を待ち侘びて　仲間　健
狐火の道案内まくらき家に
鳴り響く鐘の時代北窓塞ぐ

「人や人　汝や汝なりん　歩きーぴり」（くりかえし）
（「天」下地勇より、一部適宜引用）

・みーちゃぎんんまり　さまだず服ばーき着し回り
ぴるますんまり　夜中やぐいばしアーグあんじ　…
・なり山んみゃいすてぃ　なりぶりさまずなちーや
昔ぬ人やゆーどぅあんたーむぬ　…

・うヴゃーますむぬ　がばしゃー家ゆどぅふきうぎす
うヴゃーますむぬ　高代車どぅ買いうぎす　…

アヤグはいかに海を渡ったか（下）

琉球大学教授　仲座　栄三

前回では、なりやまアヤグがどう歌い継がれてきたかを想像し、臨場感をもって説明した。そしてアヤグが御主である神に唱える歌、文学や学問を背景に持つ歌としての共通点について触れた。また、このような文化は、古代大和文化から伝えられたものであろうとの説明を与えた。

「なりやまアヤグ」は、これまで「綾歌」や「綾語」などとも書かれ、「心をしっかりもて」とする戒めの教訓歌との解釈もあった。筆者は、これに「成功者を称え、その者の言動をも戒め、そしてそれを羨む者へ努力を促す教訓歌」としての説明を与えた。この教訓を一言で言うのなら、「ドウガタキ（すべては努力しだい、自分の身の丈を知る）」となろう。

宮古島の歴史のDNAに刻まれてきたアヤグであるが、くしくもそのDNAはさらに下地勇さんをして現代版ナリヤマアヤグを歌わせている。それは、下地勇さんの歌う「ウギャアスムヌ（羨ましいこと）」である。その歌詞の一部をここに書きだしてみよう。

・うヴゃーますむぬ　がばしゃー家ゆどぅふきうぎす
うヴゃーますむぬ　高代車どぅ買いうぎす　…

・みーちゃぎんんまり　さまだず服ばーき着し回り
ぴるますんまり　夜中やぐいばしアーグあんじ　…
・なり山んみゃいすてぃ　なりぶりさまずなちーや
昔ぬ人やゆーどぅあんたーむぬ　…

「人や人　汝や汝なりん　歩きーぴり」（くりかえし）
（「天」下地勇より、一部適宜引用）

下地さんの歌う「ウギャアスムヌ」の意は、「ナリヤマアヤグ」や「ドウガタキ」の教えを現代風に歌ったものと言える。1番は成功者を羨む者であり、2番は蔑む者、それらは対の形にある。3番はまさに「なり山アヤグ」を歌っており、従来の「綾語」の解釈によって歌われている。全体としては、「ドウガタキ」の意をなしている。

ところで、古代大和文化の影響を受けていることを強く思わせる歌がある。「バンガムリ（私が子守するから）」である。

ばんがむり　ぷどぅらさば
ヨーイヨイ
あねぃがぁぐぎー　たきやわさらば
ヨーイヨホホホーイーイイイー
（わたしが子守りして　大きくなすから）
（お姉さんがあやして　背を高くするから）
どぅすぬぱな　んまらりゃしゅうてぃ
ヨーイヨイ
あぐぬぅぱなんまらりゃしゅうてぃ
ヨーイヨホホホーイーイイイー
（友達の花としての　生まれであってほしい）
（同級生の花としての　生まれであってほしい）
島うすうい　照りゃ上がり
ヨーイヨイ
国やうすうい　照りゃ上がり
ヨーイヨホホホーイーイイイー
（島を覆うように　照りあがって）
（国を覆うように　照りあがって）
みやーくとぅなぎ　うがまりる
ヨーイヨイ
みすぱらんな　うがまりる
ヨーイヨホホホーイーイイイー
（宮古の隅々にまでも　尊敬されるようになってください）
（すべての村々で　尊敬されるようになってください）

（國吉源次および宮古島キッズネット、「ばんがむり」から一部引用）

バンガムリは、トウガニアヤグの歌詞の影響を強く受けているという意味において、アヤグの一種と解される。また、はやしとなる部分の「ヨーイヨイ」や「ヨーイヨホホホーイーイイイー」などは、まさに内地の民謡のはやしや旋律の影響を受けていることを強く印象づける。

アヤグをもたらした者たちは、海を渡る海商人たち（海の民）であったと推測される。長濱幸男氏は、宮古馬に関する長期にわたる研究によって、琉球国の建国に共に働いた「海商人」と「琉球馬」の存在の意義を発見している。古代に大和を離れた人々は、時を経て、海商人あるいは海の民として宮古島に辿り着き、大和文化を広めたものとも想像される。

そうした宮古島について聞くに及び、人々は次のように問うたのであろう。噂に聞く島とはどういう地であるか、これに「ピサラー（平らな地）」であると答える。人々はどんな言葉を話しているのか、「ミヤークフッ（都の人々の言葉）」である。文化はどうか、「まるでミヤーク（都）」である。

これまで3回にわたって、宮古島の名歌「あやぐ」について触れてきた。こうした解釈の根拠を示す資料が存在するわけではない。歌そのものが放つ意味や旋律からの想像でしかないが、宮古島のアヤグに秘められた意味を掘り起こす一助にでもなれたなら幸いである。

※本稿（中）は2023年12月16日に掲載。